

博文館版『紅葉全集』第四巻の校正と泉鏡花

市川祥子

1

博文館版『紅葉全集』は尾崎紅葉の没後^①まもなく刊行された。第一巻(明37・1・4)のはじめには「明治三十六年十二月二十五日 遺友 巖谷小波 石橋思案」として刊行の事情が記されている。

首を回せば、本年三月上旬、紅葉君大学医院に在つて、入沢・佐藤・近藤諸博士の診察を受け、到底不起の症たるを宣告せらるゝや、予等五六の親友は、直ちに十千万堂設立の事を議し、第一着に「紅葉全集」を発行するに定めて、之を君に謀つたところ、君は其の大いに我が意を得たるを喜び、病苦を推して、之が校訂に従事したのである。

死を意識した作家の全集にかける思いはどれほどのものか。各巻の終わりには、第一巻に「遺弟 泉斜汀 校」、第二巻(明37・4・18)に「遺友 石橋思案 校」、第三巻(明37・5・8) 第四巻(明37・7・13) 第五巻(明37・9・16)に「遺弟 泉斜汀 校」、第六巻(明37・12・16)に「門人 斜汀 泉豊春 校」と校訂者が記されている。作家がこの世に遺さんとした文章を伝える責任を引き受ける署名でもあろう。

その内、第四巻は「隣の女」(一)、「不言不語」(一八一)、「鷹料理」(三五九)、「三箇條」(三七二)、「冷熱」(三七八)、「全梗概」(四五九)、「浮木丸」(四八三)、「青葡萄」(五九三)、「全自序」(七二八)、「八重櫛」(七二九)を収め、「紅葉全集巻之四終」とある最終ページ(九六五)^②に「遺弟 泉斜汀 校」と記されている(一)内はページを示す)。

ここに、第四巻の校正刷りを袋綴じにして表紙を付けた三冊^③がある(本稿では【一】【二】【三】と示す)「図1」。

【一】は「紅葉全集 巻之四/目次」とある(目次(二)から「隣の女」の最後(一八〇)まで、【二】は「青葡萄」の最初(五九三)から最後(七二八)まで、【三】は「八重櫛」の最初(七二九)から最後(九六四)までである。三冊で第四巻の二分の一強の分量にあたる。

用紙の上下は切り揃えられ一部が見られないものの、朱筆で書き入れられた指示の大部分を確認することができる。その指示はほぼ確実に全集に反映されており、筆跡は複数あるが、多くは泉鏡花のものと推測される^④。他に、脱字やページの数を指示した、筆跡・色とも異なる書き入れが若干あり、内校正と推測できる。また、【一】の「隣の女」(一六)には複数の鏡花の印がある「図2」。「隣の女」(三三)には「要三校」と並んで、色の異なる「校了」を朱筆で消した跡と、色の異なる「五月十一日」を朱筆で「五月十六日」に変えた書き入れがある「図3」(一)内は書き入れを示す、ルビは取捨した)。

本稿では博文館版『紅葉全集』第四巻について、鏡花が、斜汀の校訂の他に手を加えている可能性を示したい。

2

【二】は「紅葉全集 巻之四/目次」とある(目次(二)から「隣の女」の最後(一八〇)までである。「目次」「隣の女」が欠落なく綴

じられている。書き入れは、印の他、「む」の特徴から鏡花の筆跡と推測される。「要三校」があり、ハシラに「紅葉全集」があることから二校と考えられる。

(目次(一一)には、「目次」に「少シツ、間をつめ隣の女のまん中にくむ」、「全梗概」や「(一)子おろし剂」に「□ダイニサゲル」(ナミ五号)など、文字の位置やフォント・ポイントに細かい指示が書き入れられている(□は文字のある可能性を示す)「図4」。

「隣の女」への書き入れの特徴を、その分量の多い(二六)(三六)(三七)(四二)(四四)(四五)(一一〇)を中心に整理する(ただし、全ての例を挙げるものではない)「図5-1」「図5-2」「図5-3」「図5-4」「図5-5」。他のページの書き入れも概ねこれらに類するものである。また、校正の書き入れでの変更の程度を測るために、漢字と仮名の指定について全文から主な例を示す。「隣の女」は連載(読売新聞)明26・8・20(10・7)の後、「隣の女」(明27・6・17、春陽堂)として刊行されている。比較のためそこの該当部分を参照する。

〈全集校正書き入れの指示(校正↓書き入れ)〉

1. 誤植誤字脱字の訂正、不鮮明部分の交換

例 影法師↓影法師 年中↓年中 □山↓仰山 上手↓上手

2. 漢字の指定

例 こと↓事 仰しやる↓有仰る やがて↓旋て

3. 仮名の指定

・ 促音の片仮名平仮名の交換、促音に6号の指定

例 揺込み↓搔込み 悚然と↓悚然と こつつり↓こつつり(つ6号)

・ 他の片仮名平仮名の交換

例 本当なんだ↓本当なんだ 石鹼↓石鹼 ボーン↓ぼをん

・ 他の仮名の指定

例 し↓志 は↓ハ(全体ではは↓者(六八二)志↓し(八二八)

もある)

4. 読点の追加、句点読点の交換

例 此面がと腹が立つ↓此面が、と腹が立つ 遽に女の声が聞こえた。確かに(いづれも初刊は校正に同じ) 手挟むで御無用↓手挟むで、御無用(初刊は書き入れに同じ)

5. 「」()の交換

例 「虫の音」↓(虫の音) 「す」の字↓(す)の字

6. 送り仮名の指定

例 聞↓聞き 吹澄まされ↓吹澄され 爽に↓爽かに

7. ……の間隔、*の位置の指定

〈漢字と仮名の指定〉

頁	行	初刊	全集校正	全集校正書き入れ
一七	五	こと	こと	事
二〇	一一	○(傍点)	○(傍点)	●(傍点)
二〇	一三	こと	こと	※(全集こと)
二二	五	いはれる	いはれる	言れる
二六	四	こと	こと	事
二六	八	こと	こと	事
三五	六	玻璃盃	玻璃盃	玻璃盃
三六	七	仰しやる	仰しやる	有仰る
三九	一二	済まして	済まして	澄して
四一	一〇	燈紅	燈紅	燈光
四三	一	掛かる	掛かる	かかる

【二】は「青葡萄」の最初（五九三）から最後（七二八）までである。（七二八）には自序掲載の指示がある。「青葡萄」が欠落なく綴じられている。書き入れの大部分は【一】と同じ特徴を持ち、鏡花の筆跡と推測される。「要三校」（七二一）や「三校のせつ」（七二八）もあるが【図6-1】【図6-2】、「要再校」（六七三）（七〇五）もあり【図7-1】【図7-2】、二校と初校が混ざる。初校はハシラに「紅葉全集」がない部分と考えられ、六十八丁中五十六丁分である。

3

※は綴じ目にかかるなどで見えないもの

一五六	一一	胸し	胸し	胸し
一五五	四	玻璃燈	玻璃燈	※(全集 玻璃燈)
一五五	四	磨硝子	磨硝子	磨硝子
一五三	一二	紅玉	紅玉	紅玉
一五三	一二	玻璃燈	玻璃燈	玻璃燈
一三六	一〇	胸はし	胸はし	胸はし
九六	四	細袴	細袴	細袴
七三	六	もらひ	もらひ	※(全集 貰ひ)
五一	五	ブン	ブン	※(全集 ぶん)
四八	三	これ	これ	是
四四	七	ボーン	ボーン	ほをん
四四	三	やがて	やがて	旋て
四四	一	石鱈	石鱈	石鱈

六七八	七	懐かしく	懐かしく	可懐く
六七五	九	忌はしき	忌はしき	可忌き
六六九	七	始め	初め	始め
六四九	五	こと	こと	事
六四三	九	坐つた	座つた	坐つた
六四二	八	こと	こと	事
六三三	一	スキ	スキ	スキ
六三三	一	ブランド	ブランド	ブランド
六三二	一二	ブランド	ブランド	ブランド
六二八	七	頁	頁	頁
六〇七	一〇	こと	こと	事
六〇六	四	胸し	胸し	胸し
六〇三	九	坐る	座る	坐る
五九九	五	手巾	手巾	手巾
五九五	一二	ビフステキ	ビフステキ	ビフステキ
頁	行	初刊	全集校正	全集校正書き入れ

書き入れの指示は「隣の女」と同様の特徴を持つ。ここでも、漢字と仮名の指定について全文から主な例を示す（すべて初校と考えられるページにある）。「青葡萄」は連載（『読売新聞』明28・9・16〜11・1）の後、『青葡萄』（明29・10・23、春陽堂）として刊行されている。比較のためそこの該当部分を参照する。
 〈漢字と仮名の指定〉

六七九	一二	座つた	座つた	座つた
六八一	四	ランプ	ランプ	ラムプ
六八七	一三	こと	こと	事
七〇五	一三	忌しい	忌しい	可忌い
七〇九	二	喜ばしく	喜ばしく	喜ばしく
七一四	一二	まで	迄	まで
七一五	二	ブランデー	ブランデー	ブランデー

4

【三】は「八重襟」の最初(七二九)から最後(九六四)までである。書き入れは、ルビ〔わ〕、〔を〕〔奈〕の特徴から鏡花の筆跡と推測される。数ヶ所の〔要□校〕は判読できず断定は難しいが、ハシラに「紅葉全集」がなく初校と考えられる。

書き入れの指示は「隣の女」と同様の特徴を持つ。ただし、【三】は書き入れの分量が多く【一】【二】の例では十分でないで、その点を新たに整理する。ここでも、漢字と仮名の指定について全文から主な例を示す。「八重襟」は連載(読売新聞)明31・6・5〜9・3、題「八重だすき」の後、刊行を経ず博文館版『紅葉全集』に収められた。比較のため「読売新聞」連載の該当部分を参照する。

〈全集校正書き入れの指示(校正↓書き入れ)〉
1. 文字の追加

・ 章題の下の人物

例 (五) 客間 書生実は優雄／召使実は薔薇子↓(五)客間 書生
実は優雄／召使実は薔薇子／□雄実は古里遠(八〇六)〔□雄〕

は全集 優雄) [図8-1] (六) 庭内 実は古里遠／実はおはす

↓(六) 庭内 実は古里遠／実はおはす／実はおはす／実は優雄
(八一七) (ばら) は全集 薔薇 (いづれも初出は校正に同じ)

[図8-2]

・ 傍点

例 眩暈を起してはたりと倒れる↓眩暈を起してはたりと倒れる
(八九四) 依様地球の引力でした↓依様地球の引力でした(八
九四) (いづれも初出は校正に同じ、ただし「倒」) [図9]

・ ダツシユ

例 宜いのですな。参りませう。↓宜いのですな。——参りませ
う。(九二八) (初出は校正に同じ) [図10]

・ 読点。句点読点の交換

例 何を言ふのやらお前の話は↓何を言ふのやら、お前の話は(七
九二) 暴威を振ふが! 那が耐らん。↓暴威を振ふが、那が耐ら
ん!(七九四) (いづれも初出は校正に同じ) [図11] うむ。如何
様! ↓うむ、如何様!(八八一) 然し。謂つて見れば↓然し、謂
つて見れば(八八八) (いづれも初出は書き入れに同じ) [図12]

2. 改行の指定

例 難有い。／と引手操つて↓難有い。 と引手操つて(八一

八) (三字アキツク) の指示、初出は校正に同じ [図13]

氷の如し。(と吟ずる中に、へ中略) 剣舞を始める。(四方之志はへ中
略) 鬼憎に逼る。／と益調子付いて↓氷の如し。／と吟ずる中に、
へ中略) 剣舞を始める。／古「四方之志はへ中略) 鬼憎に逼る。／
と益調子付いて(八九六) (初出と校正と書き入れは異なる、書き
入れの見えない部分は全集で補った) [図14]

3. 仮名の指定

・ 促音の片仮名平仮名の交換

例 彼と云ふのは、ふッふッふッふッ ↓彼と云ふのは、ふっふっ
ふっふっ。(九〇一) (初出は校正に同じ、ただし「のハ」) [図15]

頁	行	初出	全集校正	全集校正書き入れ
八二一	一	御坐いません	御坐いません	御座いません
八二二	一〇	掛り	掛り	懸り
八二三	一一	胸し	胸し	胸し

〈漢字と仮名の指定（明らかな誤字脱字を訂正したものは除く）〉

例 一寸と一寸(七六九)

・仮名を送りからルビに移す
例 一寸と一寸(七六九)

以つて↓以て(八五六) 那樣な↓

那樣(八九三)

例 凹し↓凹まし(八二七) 為つた↓為すつた(八八五) 知て

↓知つて(八八八)

「宜い」(八八五)

書き入れでは多くを「然う」としている。(初出は多く「然う」)

然う然う 校正では「然」が多く「然う」と混在しているが、

書き入れでは多くを「然う」としている。(初出は多く「然う」)

宜い↓宜しい 校正では「宜い」が多く「宜しい」と混在して

いるが、書き入れでは多くを「宜しい」としている。(初出は多く

「宜い」)

例 慥↓慥う 校正では「慥」が多く「慥う」と混在しているが、

書き入れでは多くを「慥う」としている。(初出は多く「慥」)

然う然う 校正では「然」が多く「然う」と混在しているが、

書き入れでは多くを「然う」としている。(初出は多く「然う」)

宜い↓宜しい 校正では「宜い」が多く「宜しい」と混在して

いるが、書き入れでは多くを「宜しい」としている。(初出は多く

「宜い」)

例 ぢや↓じや 校正では、寿右衛門の言葉の中に「ぢや」と「じ

や」が混在しているが、書き入れでは多くを「じや」としている。

ただし、じや↓ぢやも見られる。(初出は多く「ぢや」) [図17

—1] [図17—2]

4. 送り仮名の指定

・仮名をルビから送りに移す

例 慥↓慥う 校正では「慥」が多く「慥う」と混在しているが、

書き入れでは多くを「慥う」としている。(初出は多く「慥」)

然う然う 校正では「然」が多く「然う」と混在しているが、

書き入れでは多くを「然う」としている。(初出は多く「然う」)

宜い↓宜しい 校正では「宜い」が多く「宜しい」と混在して

いるが、書き入れでは多くを「宜しい」としている。(初出は多く

「宜い」)

例 凹し↓凹まし(八二七) 為つた↓為すつた(八八五) 知て

↓知つて(八八八)

・仮名を送りからルビに移す

例 一寸と一寸(七六九)

那樣(八九三)

八二四	六	旁	懸ける	※(全集 傍)
八二一	一	協つた	協つた	※(全集 協つた)
八七一	一一	掛り	掛り	※(全集 懸り)
八八一	三	何為	何有	何有
八八一	九	滴れて	滴れて	零れて
八八一	一三	如何したら	如何したら	奈何したら
八八二	三	浸徹つて	浸徹つて	浸遍つて
八八二	三	と致しても	と致しても	にも
八八二	一一	嬉くないので、	嬉くないので、	嬉くない。
八八六	五	ぐつと	ぐつと	哽と
八八六	六	為形話	為形話	形語
八八七	四	搔込むが否や	搔込むが否や	搔込むが否や
八八七	四	擧め	擧め	擧め
八八八	二	行て居た	行て居た	行つてた
八八八	八	ありませんのき。	ありませんのき。	※(全集 ありません)
八八八	九	為形話	為形話	形語
八九〇	三	お珍しいもの	お珍しいもの	お珍しいもの
八九一	三	嵐で	嵐で	嵐か何ぞで
八九一	一二	如何か	如何か	奈何か
八九二	五	※	嘘	誑

九二八	一一	為形話	論ぢやない	為形話	論ぢやない	形語	論ではない
九二七	一一	宜い宜くない	宜い宜くない	宜い宜くない	宜い宜くない	履	宜しい宜くない
九二四	四	踏	踏	踏	踏		
九一四	一三	為形話	為形話	為形話	為形話	形語	形語
九〇四	四	為形話	為形話	為形話	為形話	形語	形語
九〇〇	九	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘
九〇〇	七	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘	嘘
八九九	一三	険い	険い	険い	険い	殆い	殆い
八九九	八	為形話	為形話	為形話	為形話	形語	形語
八九八	一一	それ	それ	それ	それ	※(全集 其)	※(全集 其)
八九七	九	為形話	為形話	為形話	為形話	形語	形語
八九六	五	忍び	忍び	忍び	忍び	忍□可から	(全集 忍ぶ可から)
八九六	一	ばかりでない	ばかりでない	ばかりでない	ばかりでない	ばかりでない	ばかりでない
八九五	一〇	那程に然う	那程に然う	那程に然う	那程に然う	那程然う	那程然う
八九四	三	如何	如何	如何	如何	奈何	奈何
八九三	七	如何	如何	如何	如何	奈何	奈何
八九二	一二	打明けてと、	打明けて、	打明けて、	打明けて、	打明けてと、	打明けてと、
八九二	一二	兄様	兄様	兄様	兄様	兄様	兄様
八九二	七	御坐います	御坐います	御坐います	御坐います	御坐います	御坐います

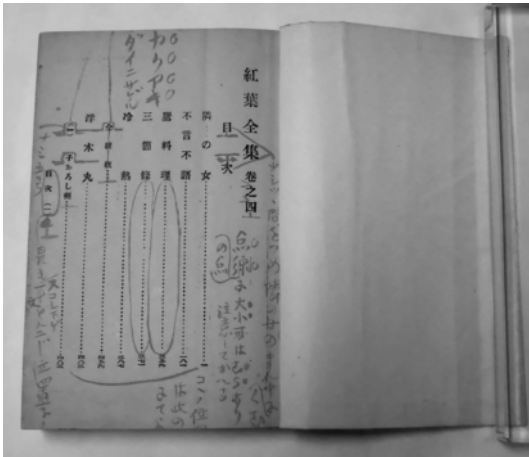
5

九三二	一〇	御坐います	御坐います	御坐います
九五〇	三	為形話	為形話	形語
九六一	一二	拵り	運り	拵り
九六二	八	掛ける	掛ける	懸ける

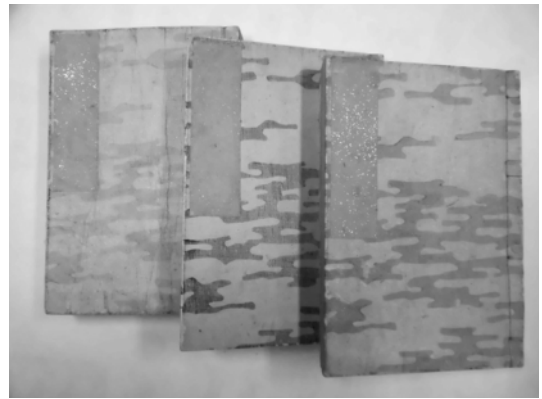
〔図18-1〕〔図18-2〕〔図18-3〕

【一】【二】【三】の校正の書き入れには、文字の位置の指定や不鮮明部分の交換など印刷の体裁を整えるものと、文章とその用字に関するものがある。後者の内、たとえば【一】「隣の女」の「〇(傍点) ↓(〇(傍点) ↓(●(傍点) (二〇(〇(傍点) ↓(ボーン) ↓(ボーン) ↓(ぼをん) (四四) (初刊初出 ↓二校 ↓書き入れ) のように、底本と推定できる初刊初出と校正で変わらない文字が、校正の書き入れで変わっている箇所が注目される。特に、校正の書き入れで変わっている箇所は【三】「八重襷」に多い。章題の下の人物の追加(追加の内容は合理的である)、傍点やダッシュの追加があり、「と致しても」 ↓「と致しても」 ↓「(にも) (八八二) のように、校正の書き入れで語句が変わったり、読点が追加されたりした箇所が複数ある。

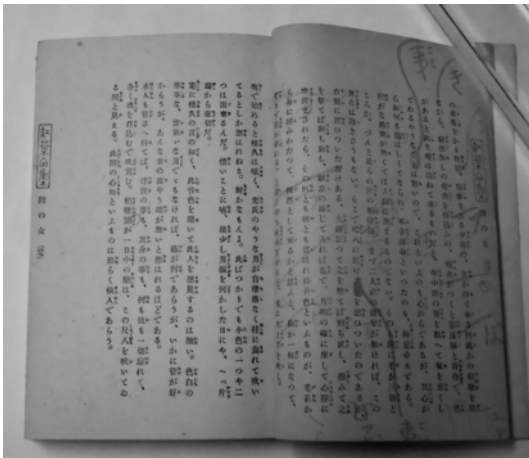
こうした変更は、ひとつには、「病苦を推して、之が校訂に従事した」紅葉の指示を、遺された鏡花が反映させたものと考えることができよう。しかし一方で、紅葉の指示ならば校正までの段階で反映させることができたはずであり、校正の書き入れで行われている点を重視すれば、紅葉の意向を汲むことを大前提としても、鏡花の判断で文章や用字を変えた可能性も否定できない。全集全体の特徴とも比較して鏡花の関与の程度を測るべきである。それにしても、たとえば「春着」(大



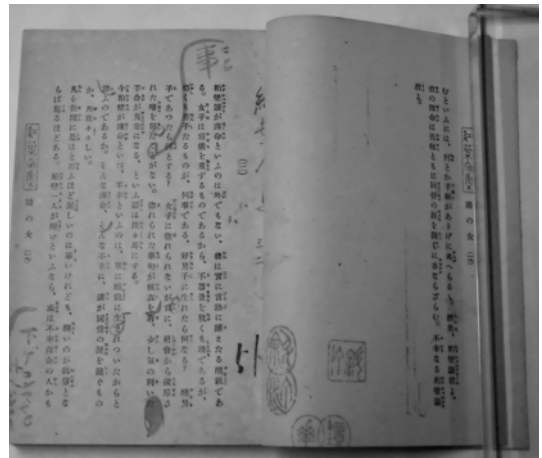
[図4 目次 P1]



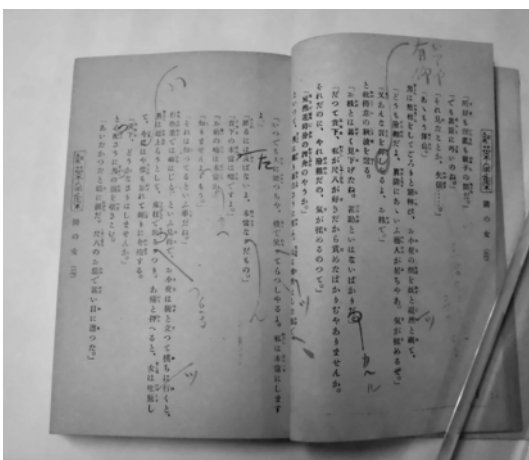
[図1 博文館版『紅葉全集』第四卷校正3冊]



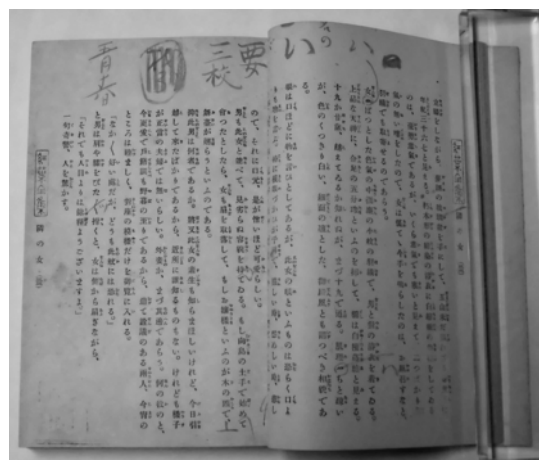
[図5-1 P26・27]



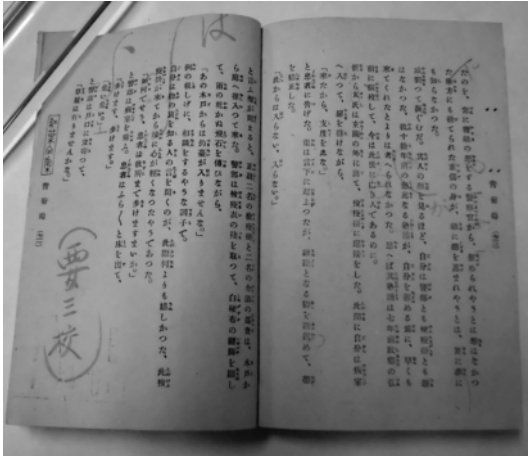
[図2 P16・17]



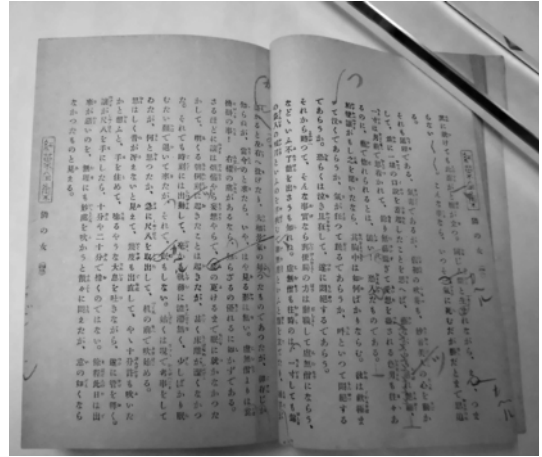
[図5-2 P36・37]



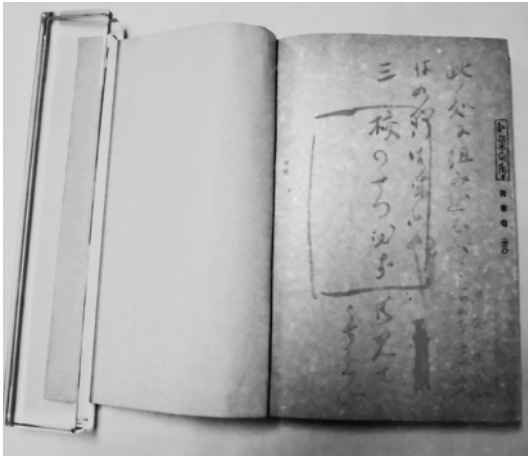
[図3 P32・33]



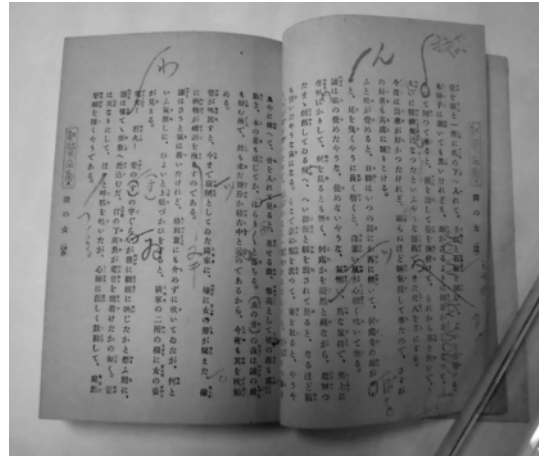
【図6-1 P720・721】



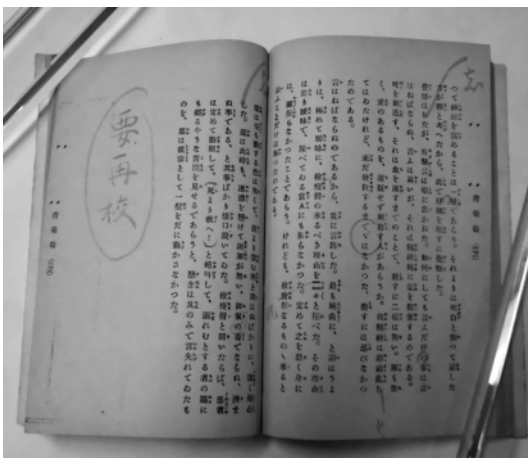
【図5-3 P42・43】



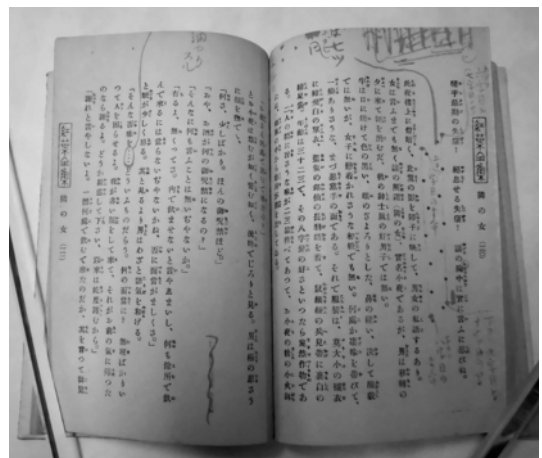
【図6-2 P728】



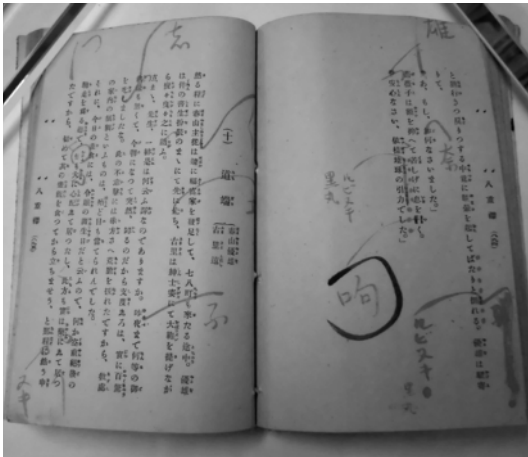
【図5-4 P44・45】



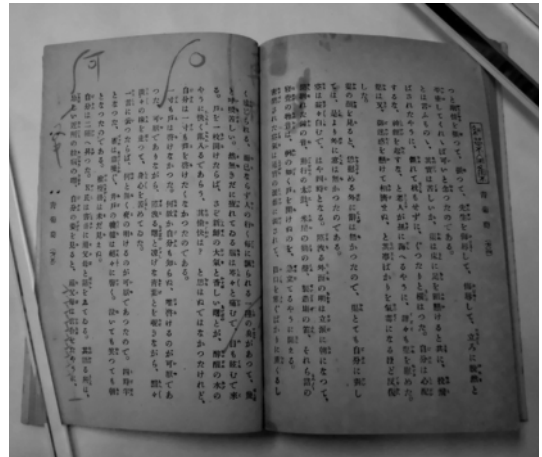
【図7-1 P672・673】



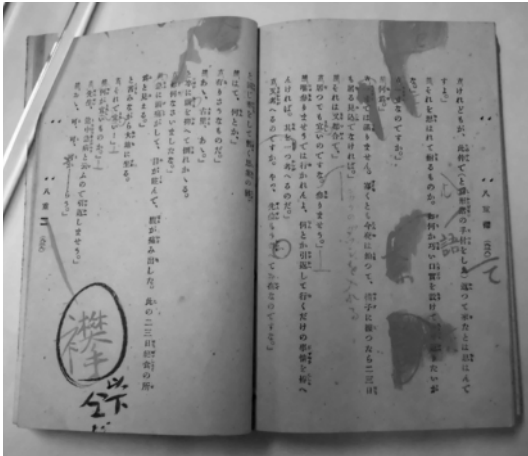
【図5-5 P120・121】



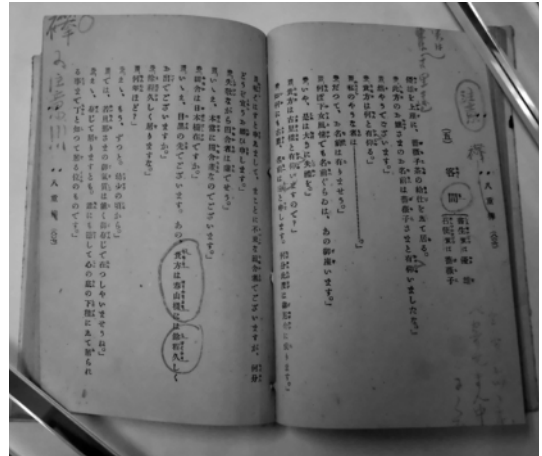
[図9 P894・895]



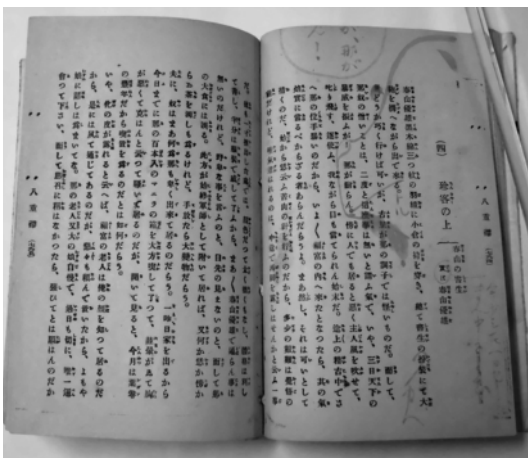
[図7-2 P704・705]



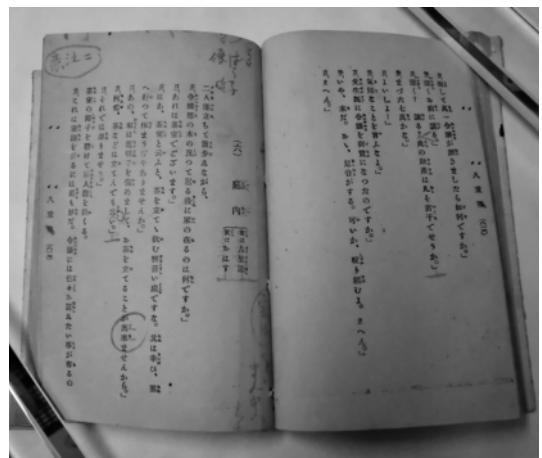
[図10 P928・929]



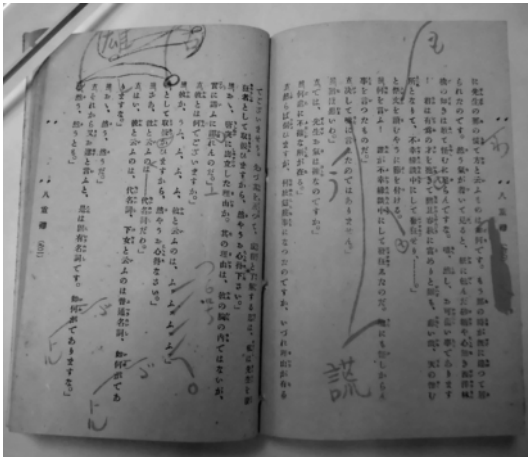
[図8-1 P806・807]



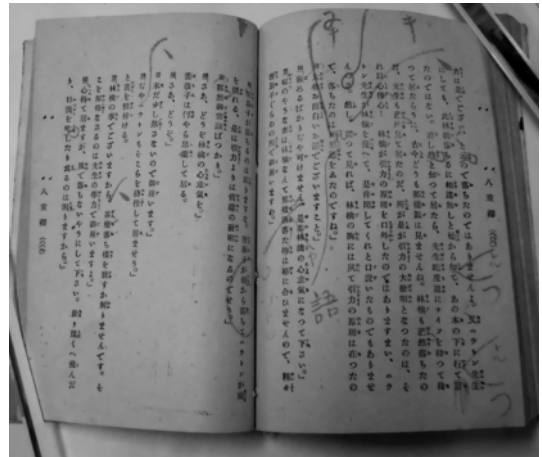
[図11 P794・795]



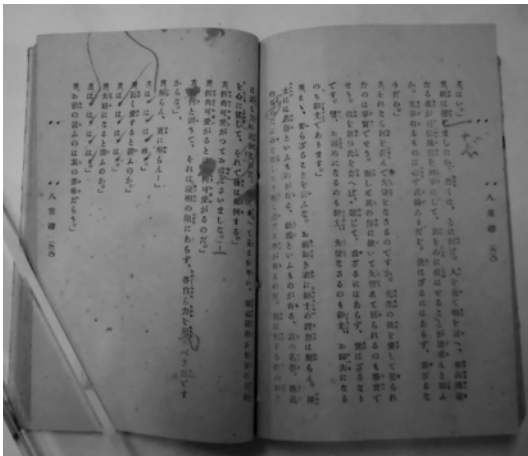
[図8-2 P816・817]



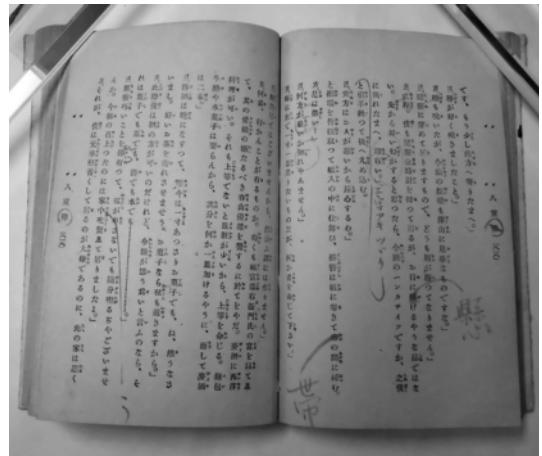
[図15 P900・901]



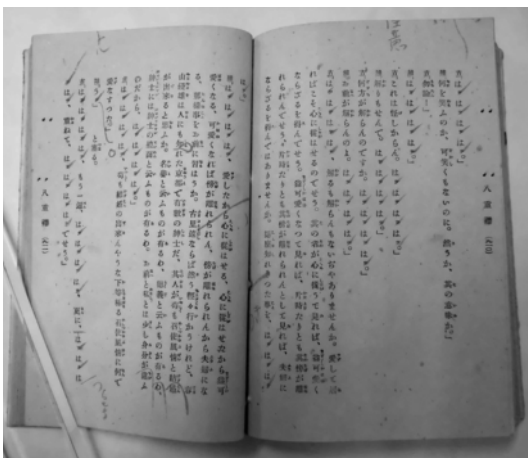
[図12 P888・889]



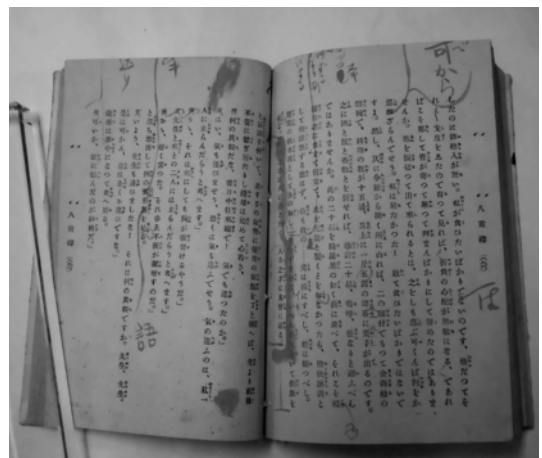
[図16-1 P908・909]



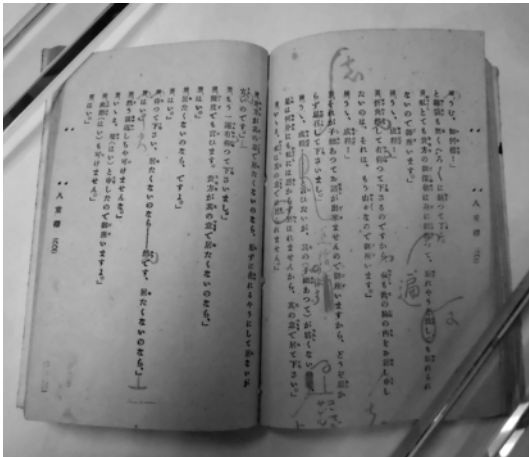
[図13 P818・819]



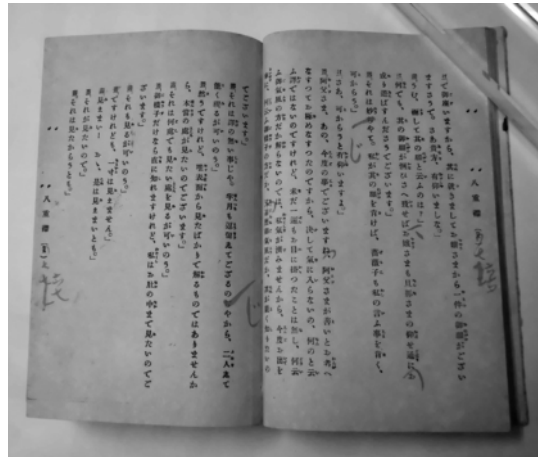
[図16-2 P910・911]



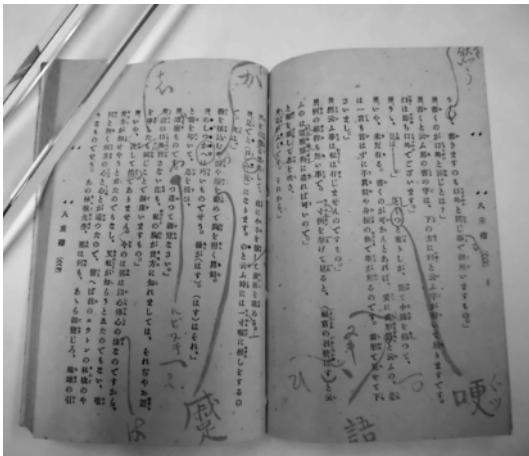
[図14 P896・897]



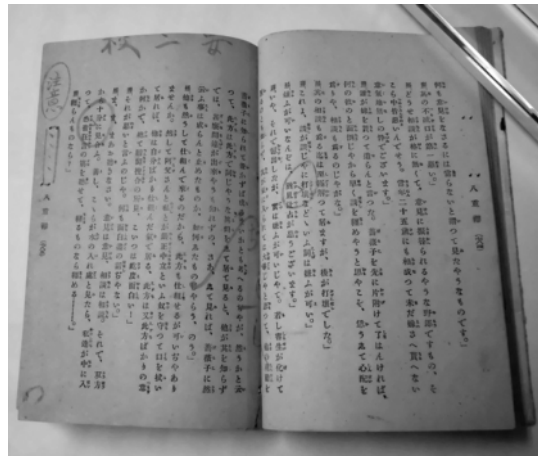
[図18-2 P882・883]



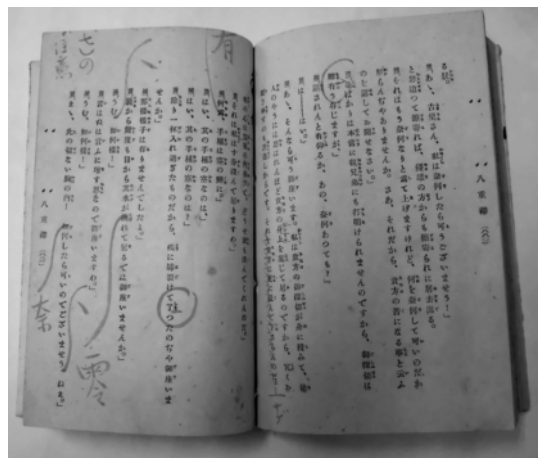
[図17-1 P766・767]



[図18-3 P886・887]



[図17-2 P784・785]



[図18-1 P880・881]